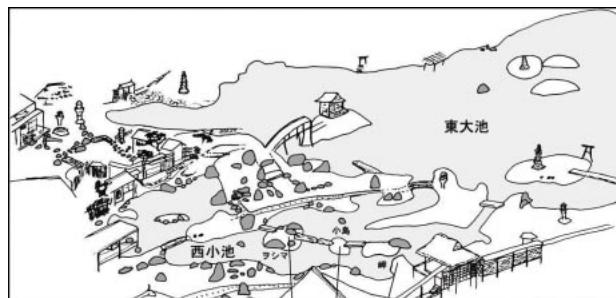


旧大乗院庭園(平城第390次)

大乗院は、今の興福寺境内の北側にひろがる一乗院と並ぶ興福寺門跡寺院です。もともと一乗院の東側にあったものが、治承5年(1180)に元興寺の子院である禅定院のあった現在地に移転しました。その後、宝徳3年(1451)に徳政一揆によって焼失しましたが、尋尊によって建物及び庭園が整備され、その後の庭園の骨格ができました。これが、その後、改修を加えながら江戸時代にまで存続し、その情景が『大乗院四季真景図(江戸末期)』などに描かれています。この調査はナショナルトラストから依頼され、その姿を発掘で確認し、整備の資料とするために毎年継続しておこなっているものです。

今年度の調査は、旧国鉄(現JR)の宿泊施設であった大乗苑が建っていた地点からこれまでの一連の発掘調査で全貌がほぼわかりかけてきた西小池の西岸にかけての位置です。調査は7月19日から重機による上土及び鉄筋建物の基礎の撤去等を開始し、7月



「大乗院四季真景図(興福寺蔵)及び興福寺旧大乗院庭園図」(「風景」第6巻第3号掲載)より作成



今回の調査区と絵図の対照



江戸時代の層の下から顔を出した室町時代の砂層と土器

29日より手掘りを開始しております。

庭園の重要な構成要素である西小池が埋まっている後、当地点は奈良でも歴史のある飛鳥小学校や建設会社の倉庫、そして大乗苑など幾多の歴史を経ていているため、江戸時代の姿を明らかにするまで多少の手続きが必要で、右下の写真がおそらく池西岸を埋め立てた後の姿と思われます。これを記録して、池が機能していた時期の具体的な様相を明らかにしていく予定です。

それにより、西小池の全容をつかみ、その南からの排水施設も確認する見通しです。さらに、絵図に描かれている池の西側に建てられた湛雪亭と塀などの施設がつかめるかもしれません。

(平城宮跡発掘調査部 高橋 克壽)



調査区南端の東西溝(大池からの水を排水する施設)



池の西側に広がる南北溝(南から)